イエス様の教えと行動に学ぶ

ルカ６；１〜１１

　イエス様の教えと行動は、とても不思議です。イエス様は、旧約聖書の予言の成就、あるいは約束の成就としてお生まれになった救い主です。そしてまたイエス様は、旧約聖書が神からの権威を持つ書物であることを認め、そこに書かれていることは最も小さな部分、一点一画に及ぶまで、大切にされなければならないと教えられました。

　ところがその一方で、いま読んだ出来事のように、イエス様は大胆に、またわざわざ、あえて旧約聖書の律法をお破りになったり、無視したりしていることがとても多いのです。姦淫の場で捕らえられた女をそのまま帰したり、最も汚らわしい罪人と思われていた人たちの家を訪れ、食事を共にしたりなさったのです。

　イエス様の教えを観察すると、旧約聖書の生真面目な律法の解釈による、厳格な神のイメージはどこかに消滅し、大らかで優しく、あくまでも人々の幸せを望んでおられ、目いっぱい融通を利かせておられる、優しい父親の姿が浮かんできます。

Ⅰ.　旧約聖書の完成としてのイエス様　旧約聖書は、罪のために死に定められた人間に、神が救い主を与えて下さるという尊い約束が記されている書物です。それがこの書物の主題であり、この書物が与えられた目的です。人間はこの書物なしには、救い主について知ることができないのです。その書物の約束を成就するために、おいでになったのがイエス様です。

　ですから、イエス様の生涯は旧約聖書の成就なのです。それはユダヤ人に向けて書かれたと思われる、マタイの福音書で繰り返し語られている通りです。

　イエス様は旧約聖書で告げられているように、ご自分を人間の罪を贖う完全な犠牲として、捧げて下さいました。単なる予表に過ぎなかった過ぎ越しの羊が指し示す「実物」として、十字架にかかり、尊い血潮を流してくださいました。荒野でモーセの杖によって打たれ、民の飲む水を吐き出した岩が指し示す常世の岩となって、ご自分が神によって打たれ命の水を湧き出してくださいました。数限りなく捧げても人間の罪の贖いは出来なかった、羊や山羊や牛のような不完全な象徴としての犠牲ではなく、ただ一度だけで完全に贖いを成し遂げる、非の打ち所がない本物の犠牲として、聖い血を捧げて下さいました。イエス様は律法を全うする者として、来てくださったのです。

Ⅱ.　旧約聖書の戒律を破られたイエス様　ところが、律法を全うされたと宣言されているイエス様ではありますが、実のところ、イエス様は方々で律法を「積極的に」破り、あるいはあえて無視して行かれました。そのために、直接的には、まさにそのことのために、反対者の策略にかかって、命を落とされたのです。イエス様は、旧約聖書の律法を律義に解釈し、文字通

り実行すべきだと考える人々とは異なって、律法の文字にはこだわらず、その真意を大切になさったのです。

イエス様は、わざわざ幾度も安息日を破り、破ることを弁護されました。さらに姦淫の女や律法の定めに反した女をいたずらに罰することをせず、（ヨハネ 8：1～11） 律法をないがしろにしていた男たちを心から愛し、交わりと助けの手を伸べて下さいました。（マタイ 9：10～13）そして、神は律法をひたすら守ることを意味する「いけにえ」よりも、人間の本源的優しさを意味する、「憐れみ」をお喜びになりますと、律法を引用して教えてくださいました。（マタイ 12：7）パリサイ人と罪ある男の二人が、共に祈ったという譬え話でも、イエス様は、徹底して旧約聖書に従おうと努力し、それをやり遂げていると自覚しているパリサイ人を、神に退けられた者として描き出し、罪の生活をしていてまともに祈ることさえできなかった男を、神に受け入れられたと断言されたのです。（ルカ 18：9～14）

Ⅲ．　心に記された律法をより大切にされたイエス様　イエス様は、決して、律法を無益なものとして退けてはおられません。かえってその真髄を知っておられ、神を敬愛し、隣人を愛することを、律法の最高峰あるいは基盤とされたのです。それは細かい律法の順守ではなく、律法の精神の遵守です。それは文字で書かれた律法だけではなく、心に記された人間の本能としての律法、（ロマ 2：12～15）神に似せて造られた人間の本性としての律法につうじるものです。（創世記 1：26～27）

文字で書かれた律法は、あくまでも罪に陥って救いを必要としている人間に、救い主が与えられることを告げ、その準備をさせるためのものです。それに対して心に記された律法はより本源的であり、人間が人間として生きるための基本的あり方を示し、教え、励ますためのものです。ですから文字で書かれた律法は、イスラエル民族という選ばれた人々を直接の受け手として与えられ、心に記された律法はすべての民族に与えられているものです。同じ神によって与えられたものでありながら、与えられた目的と、与えられた事情が全く異なっています。文字で書かれた律法は、それを学び、努力して守るものです。一方、心に記された律法は,人間の本能的な心の働きとして機能するものです。

イエス様は文字で書かれた律法の成就としておいでになりましたが、強調なさったのは心に記されている律法に従って、優しく、大らかに、神を信頼して生きることでした。空の鳥を見、野の花を見、優しい父親の姿を想い浮かべることによって、おのずとそのお姿が分かってくる、天の父を信頼して生きるように教えられたのです。

Ⅳ．　救い主を指し示す旧約聖書と、人の生き方を示す心の律法　今私たちに必要なのは、文字で書かれた律法である旧約聖書の機能と目的を理解することです。ここに記されている律法は、あくまでも、救い主を受け入れる民族としての、イスラエルの在り方を説いているものであり、それをそのまま、異邦人である日本人に適用してはならないということです。日本人に必要なことは、心に記された律法、人間の在り方を本能的にわきまえて、生きることです。

　ただし、心の律法だけでは、真の創造主のことが分かりません。罪のために、心に記された律法の文字が、薄くなっているからです。それで、イスラエル民族に神の姿を明らかに教えられた部分が、とても大切になるのです。「私はあるものである」とおっしゃった神の自己紹介、天地創造の物語でご自分の本当の姿を教えて下さった自己紹介の部分が、とても重要になるのです。

　日本という異邦人の世界に生きるクリスチャンとして、わたしたちは、日本人の心に残されている神に似た姿を大切にする一方、それに加えて、文字で書かれた律法の中の、神の自己紹介の部分をお伝えしたいと思います。日本人に、真の神について理解してもらいたいと願うものです。使徒パウロが、異邦人の町アテネで福音を語った時、まずやったのは、異邦人に天地創造の神を知らせることでした。それが救い主、すなわちキリストを正しく理解する、前提条件なのです。天地創造の神を理解せずに、キリストを理解することはできないのです。